

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
事後評価（平成29（2017）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 同志社大学大学院・脳科学研究科（教授・坂場 武史）
研究交流課題名 光生物学を軸とした神経可塑性研究拠点の形成

評価結果（総合的評価）

- S 想定以上の成果をあげており、当初の目標は達成された。
- A 想定どおりの成果をあげており、当初の目標は達成された。
- B ある程度成果があがり、当初の目標もある程度達成された。
- C 成果が十分にあるとは言えず、当初の目標はほとんど達成されなかった。

所見

本事業は、最新の光学顕微鏡技術を駆使して神経可塑性の分子基盤を明らかにすることを目的とし、記憶・学習記憶の素過程である神経伝達物質放出機構の解明を目指した共同研究ネットワーク構築を推進した。国際交流は双方向の実質的なものであり、その世界的水準が十分に高いことは、交流拠点との共著を含むインパクトの高い数々の論文によって示されている。

若手研究者育成に関しては、研究・国際交流・その成果発表の機会が十分に与えられている環境で、交流が積極的に行われている。相手国研究室に留学していた若手研究者が帰国後にアカデミックポジションを得るなど、キャリア形成につながったり、ポスドク、学生が主著者となった共同研究論文が報告されるなど、多くの若手研究者が育成され、次世代育成が進んでいる。

中間評価における指摘事項に対しても適切な対応がなされ、ほぼ毎年コンスタントに一定レベル以上の論文を発表し続けたことは称賛に値する。また、高校生・大学生向けの「夏の学校」の開催は、効率的な社会への還元である。

2020年度以降はコロナ禍で交流は大幅に制限されたが、今後構築された国際ネットワークによる国際共同研究の一層の発展や若手研究者の育成が期待される。